

沖縄の字公民館図書室の設立と展開

—読谷村・字波平の事例を通して—

嘉納英明

はじめに

小林文人は、沖縄の社会教育史研究の歴史を民衆の側からとらえる視点の重要性を説き、字（集落）公民館についても、民衆の生きる闘いと自治と共同の自力建設の歴史のなかから形成されてきたと指摘している [小林 1988 : 1-5]。小林の地域史・民衆史に立脚した沖縄社会教育史研究の視点は、民衆が自ら生きるために積極的・主体的に努力を積み重ねてきた歩みを沖縄教育史全体のなかに位置づけ、刻み込むという点で重要な示唆を与えるものである。また、末本誠は、「琉球政府下、公民館の普及・定着過程—ムラと公民館」の論考で、戦後確立した字公民館体制を通じて、従来の字公民館活動には見られなかった新しい活動として、字公民館主催の講座開設や新生活運動の推進、教育隣組の結成、図書室の充実・普及があるとし、それは集落ごとの自治的な努力が不可欠であったと指摘している [末本 1988 : 195-226]。こうした民衆による自治的な努力と共同の力により生成された活動は、その後も多彩で大きな広がりをもって展開した。例えば、それは、字公民館を中心にした伝統芸能の復活・継承、文化まつり、字誌づくり、教育隣組や子ども会の活動、文庫活動等の様々な社会教育の活動実践・運動であり [小林 2002]、青年会による地域の民俗芸能の再生による共同性の再構築をつくる実践等である [山城 2007]。

本稿では、こうした字公民館を拠点に広がる地域の教育文化活動の動向を踏まえながら、地域住民への読書文化の普及を図るために住民自らが字公民館内に設置した図書室・文庫（以下「公民館図書室」と略）に注目するものであ

る。この公民館図書室は、子どもを含む地域住民の読書環境の基盤の一端を形成し、集落に住む子どもに対して日常的（気軽）に文字や図書にふれる機会を提供してきた点で実に教育的な機能を有している。また、住民が主体的に公民館図書室を設立し運営を支え、また、住民の読書文化要求を直接、その運営に反映させようとする、まさしく住民に開かれた地域一体型の教育文化機関としての役割を果たしてきた。このような住民に開かれた公民館図書室は、戦後の“むら”の復興と再生というプロセスのなかで生まれてきたものであり、そこには、自主的な図書室運営を志向する住民の自覚的な自治意識が基底にあったのではないと思われる。そして、字公民館の組織のなかに公民館図書室という子どもの教育文化に関わる自治的・共同体的機能が位置づけられ、その教育文化環境を住民の共同事業として営み、今日、具体的な姿として我々の前に提起しているといえる。

以上をふまえて、本稿では、地域興し・村興しの“むら”として知られ、字公民館を拠点に地域づくりの運動や諸活動も盛んな沖縄県読谷村の公民館図書室に注目し、次の二点を柱に、公民館図書室の成立の経緯、要因、展開過程について考察する。まず一点目は、公民館図書室の設立において民衆の自治と共同の力を集約しそれを発揮したのは、字の青年会であるが、公民館図書室設立時の青年会関係者の証言や関係資料の分析を通して、設立の目的や運営状況について考察をする。二点目は、青年会主導の公民館図書室の設立・運営から字公民館の組織として図書室が改めて位置付け直されるが、その経緯とその後の地域における図書文化活動の広がりについて考察し、あわせて、字の青少年

の健全育成とどのように関連していたのかについて検証する。以上の二点の考察を通して、本稿は、戦後の“むら”の復興過程において、青年会を中心とする住民の自治文化運動の成果として公民館図書室が生成され、定着してきたことを検証する。

1. 読谷村内の公民館図書室の設立

(1) 読谷村と字波平

読谷村は、沖縄本島中部の西海岸に位置し、東シナ海にカギ状に突き出た半島にある。1972年(昭47)の日本復帰時の人口は2万3千人であり、その後人口は増え続け、現在では3万9千人余を数えている。1985年に発足した村内で最も新しい行政区である「大添」を含めて23の行政区がある。読谷村は、独特の文化圏を形成し、「読谷山花織」、「喜名焼」に代表される焼物等の伝統工芸や各地の民俗芸能が盛んな村である。沖縄戦では米軍の上陸地点となり、空と海からの猛爆により焦土と化し、戦後一時期は村域のほとんどを米軍により基地として接收された。村内で元の居住区に戻れずに強制的に他地区に移住させられた者も多い。このようにして読谷村は焦土のなかから戦後復興を始めたのであり、戦争を生き残った住民は自らの生活再建と共に地域復興が最大の願いであった。

住民の戦後復興の拠り所となったのは、各集落に存在した字公民館である。字公民館は、戦前は、「村屋」「事務所」と呼称され、戦後は、字公民館として再建されると、集落の復興の中核的な機能を併せ持つようになる。そのなかでも字波平は、戦前から村内で最も人口の多い集落として知られている集落である。戦後、戦禍を避けるため県外や台湾、国頭の山中に避難してきた住民も帰村し、村の復興を始めた。1949年(昭和24)6月、敗戦後の混乱した地域環境の整備と住みよい集落の再建をめざして、波平振興会が発足した。振興会の目的は、会員相互の研修、農村娯楽の開催改善、農作物の増産保護取締、風紀取締、体育の奨励、火災・盗難・暴行の予防鎮圧等であった。また、波平青年会

(1947年)、波平婦人会(1948年)、学事奨励会(1950年)等の教育組織が次々と結成され、字公民館を拠点に村の教育復興が図られ、以後、青年と婦人による地域活動の広がりがみられた。とりわけ青年会は、生き残った僅かな会員で青年会独自の修養の場として波平青年倶楽部を建てたり、字内に防火用水溜池の設置や自警団を結成したりして、字の生活安定のために活動を始めていた。村の復興の動きのなかで、この波平青年倶楽部は、文化復興の礎として、また公民館図書室の原型の文庫設立運動へとつながるのである。

(2) 青年会と公民館図書室

青年会は、字の戦後復興において大きな役割を果たしたが、ここでは特に、文庫・図書活動との関係に注目したい。戦後、字公民館のなか

表1. 読谷村の青年文庫(1956年12月現在)

字名	公民館構造	備考
1.喜名	瓦葺平屋	青年文庫175冊
2.親志	竹かや葺	
3.座喜味	瓦葺平屋ブロック壁	
4.上地	—	
5.波平	木造瓦葺平屋	青年図書館蔵書700冊
6.都屋	木造瓦葺平屋	
7.高志保	瓦葺ブロック壁	青年文庫107冊
8.渡慶次	スラブ葺ブロック建	青年文庫200冊
9.儀間	草葺	
10.字座	瓦葺平屋板葺	青年文庫603冊
11.瀬名波	瓦葺平屋ブロック壁	青年文庫70冊
12.長浜	瓦葺平屋ブロック壁	青年文庫755冊
13.伊良皆	瓦葺平屋ブロック壁	
14.楚辺	一部スラブ平屋 瓦葺ブロック壁	青年会図書500冊 児童用300冊
15.渡具知	瓦葺平屋ブロック壁	青年文庫220冊
16.比謝	瓦葺平屋ブロック壁	
17.大湾	瓦葺平屋ブロック壁	青年文庫80冊
18.古堅	草葺平屋	
19.大木	瓦葺平屋	
20.牧原	—	
21.比謝町	—	
22.長田	—	

読谷村役場総務課『村の歩み』1957年、60頁。

に文庫あるいは図書室を設置し、住民の読書文化の向上を図る取り組みは県内各地域でみられた。1950年代、沖縄本島の中部地区にある具志川村（現、うるま市）では村青年連合会が村議会室の一部を借りて「青年文庫」を設置し、字公民館への「巡回文庫」を実現させたり〔うるま市具志川市史編さん委員会編 2006〕、北谷町では、地元の青年会が字公民館の一角に青年図書館のスペースを確保したりしていた（桃原区青年文庫⁽¹⁾）。これは青年会活動の一環で地域に文庫を設置した事例であり、一方、豊富な財源を基盤に宜野座村や金武町では、字公民館の中に図書室を設置し、専任司書も配置する等の教育文化活動を展開している地域もある。宜野座村や金武町の場合は、潤沢な予算を活用しての設立であった。

読谷村の場合、1931年（昭和6）に沖縄県連合青年団の大会で通俗教育の観点から「青年文庫の普及及び充実を図ること」が決議されていたが、既に、字渡慶次では、1922年（大正11）に青年文庫が設置され〔山城吾助編 1971〕、字高志保では、1934年度（昭和9）以降、公民館予算に図書費が計上されていたり〔高志保区 1932〕、字波平では戦前事務所内に図書館が設置されていた〔新垣秀吉編 1969〕。このように、戦前から集落社会で文庫または図書に関わる動きがあったことに留意したい。

戦後、読谷区教育委員会は、字公民館の実態調査を実施している。調査結果をみると、1956年（昭和31）の時点で、村内の字公民館内で図書・文庫活動を展開したのは、村内22の字のなかで10字を占め、村民の半数が字の文庫の存在を身近に感じていた（前頁「表1. 読谷村の青年文庫」）。この資料をみると、「青年文庫」と呼称されている文庫が多く、「青年図書館」「青年会図書」と呼ぶ地域もある。蔵書数に注目すると、字楚辺は、1951年（昭和26）に青年図書館を開設し、青年会図書500冊、児童用300冊を保持して村内一の蔵書数を誇り、字長浜は755冊、字波平は700冊の蔵書を有し、村内での文庫活動は一定の広がりをもって展開していたといえる。村内の字公民館内に図書室が設置され活動を展開していたのは驚きであり、字楚辺、

字波平、字座喜味では、専任の司書を配置し図書の貸出業務を展開し、住民の文化的な教養を高める地域の施設として存在してきた⁽²⁾。「表2. 字別一人当たりの図書数」をみると、一人当たりの図書数が多いのは、字波平であり、字楚辺、字渡慶次と続いている。なお、字渡慶次の公民館図書室では、文学作品や小中学生向けの教育関係書が揃っていた⁽³⁾。

2. 青年会主体の文庫活動と波平青年図書館の設立

戦後の読谷村の文庫設立に関わる動きがいち早く見られたのは、字波平である。この文庫設立の動きは、戦後の字の経済と文化振興を願う住民の願いと重なるものである⁽⁴⁾。波平公民

表2. 字別一人当たりの図書数

字名	図書(冊)	人口(人)	図書数/一人当たり
1.喜名	825	1,745	0.47
2.親志	50	148	0.34
3.座喜味	520	1,616	0.32
4.上地	—	75	
5.波平	3,169	2,246	1.41
6.都屋	29	541	0.05
7.高志保	601	1,530	0.39
8.渡慶次	1,100	1,380	0.8
9.儀間	20	830	0.02
10.字座	58	1,198	0.04
11.瀬名波		902	
12.長浜	200	1,140	0.18
13.伊良皆	30	775	0.04
14.楚辺	2,300	2,385	0.96
15.渡具知	73	658	0.11
16.比謝	20	450	0.04
17.大湾	150	694	0.22
18.古堅	34	796	0.04
19.大木	20	600	0.03
20.牧原	—	251	
21.比謝缸	—	206	
22.長田	10	139	0.07
計	9,209	20,305	0.45

読谷区教育委員会『昭和43年度 社会教育資料公民館編（情報交換第10号）』（1968年4月1日現在）

館は、戦前から現在地にあったが、戦禍により灰燼に帰し、1947年（昭和22）に「仮事務所」として字民の行政事務を行った。翌年には、木造茅葺の行政事務所を建築し、1950年（昭和25）、木造赤瓦葺の「字波平区事務所」として住民の戦後処理の一切の業務を担った。1952年（昭和27）、公民館設置要綱により、波平区事務所は「波平公民館」と改称され、以後、集落の公民館としての活動が行われるようになる。戦禍を避けるために各地に避難していた字民も波平に帰郷し、戦後復興の中心的な役割を果たす波平公民館の整備がこの頃進むのであった。一方、住民の歩みを記した『波平の歩み』によれば、波平の青年会による読み古された月刊誌キング講読倶楽部等がつくられ、青年会員や住民からの寄贈を受けて青年倶楽部内に、「波平青年文庫」を創設した、という。波平公民館からほど近いアガイジョウ（遊び庭）にて米軍払い下げのコンセットがあり、そこが青年の交流の場になっていたのも、青年倶楽部と呼ばれていた。

青年倶楽部は出入りが自由な場であり、卓球台等がおかれ、中高校生や青年のいわゆる遊び場となっていた。波平在住の上地正夫（昭和8年生）は、青年会がアガイジョウの米軍コンセットに青年倶楽部を結成し、米兵が集落に侵入しないように自警団や防火見廻りをしていたことを証言し⁽⁵⁾、上地武雄（昭和11年生）は、大型のコンセットの中には雑誌や卓球台があったことを述べている⁽⁶⁾。『波平の歩み』では、上地正夫の証言を裏付けるように、村の再建のために青年会の組織化が図られ、防火用水の確保と警察と協力しての自警団の結成を行ったことが記されている〔新垣秀吉 1969〕。敗戦直後の波平青年文庫関係の資料は皆無であり、当時の関係者の記憶も定かではない。しかし、少なくとも波平青年文庫は、波平の青年会との関わりの中で生まれ出たものであり、村の復興を願い、活動を始めたものであることが確認できる。

波平青年文庫が「公民館図書室」としての体裁が整えられるのは、1950年代に入ってからである。1951年（昭和26）の台風により青年

倶楽部が倒壊した後、当時の青年会長だった知花昌徳（昭和5年生）は、区内の会員に図書館建設を呼びかけるとともに、資金計画、建築計画等を議論した。会員一人当たり二百円の負担と字内有志、会員の労力奉仕によって、総工費五万五千元で、1952年（昭和27）に木造赤瓦葺の独立した図書館が完成した。

知花昌徳は、なぜ、図書館建設を提案したのか。字波平に図書館が必要であると考えた知花は、戦後の新しい時代を迎えて、戦前の農業を中心とする生活スタイルから、学問をすることで新境地を開いていくことが大切であると認識していたからである⁽⁷⁾。また、知花は、①戦後の混乱期の中で時代を切り拓き、青年の目を開かせるためには図書館が必要であったこと、②その図書館建設に対しても住民のなかには反対もあったが、図書館建設の提案についてはやがて理解が得られたため、青年会費から図書費を計上して建設したこと、③司書に相当する図書係を置いたこと、を語っている。こうして青年倶楽部から始まった波平青年文庫は、波平青年会の主体的な運営によって図書文化運動を始めたのである。青年会費から図書館建設経費を計上し、住民総ぐるみで波平青年文庫を建設したわけであるが、実際の文庫の実務や運営は青年会から選出された図書係に委ねられた。

上地正夫は、図書館建設当初に配置された図書係の1人である。上地は、役場勤務の傍ら、兼職で無給の図書係を担当し、波平の子どもだけではなく、近郊の集落の子どもも文庫に通っていたことを述べている。文庫の図書は、貸文庫業を営んでいた者から譲り受け、また波平青年会は1953年（昭和28）から青年会費を2倍に引き上げて、その内の半額を文庫経営に充てた。このように波平の青年文庫は、波平の青年による発案から生まれ出たものであり、青年会の自発的・自主的な運営を行っていたといえる。しかしながら、文庫運営の財源は青年会員から拠出された会員予算をもって運営されていたため、財政的には厳しい状況が続いた。そのため、1954年（昭和29）から1961年までは、公民館の運営予算から青年文庫に対して図書購入費が助成された。例えば、1956年（昭和31）

の波平公民図書館の全予算は29,900円であり、その内、青年会負担金15,000円、公民館補助金14,400円、雑収入（寄付金他）500円である。公民館補助金は全予算のほぼ半分であった。また、予算の主な支出は、図書購入費や月刊雑誌購入費に充てられた〔波平図書館 1956：21〕。

以上のことから、波平公民図書館の運営主体は、波平青年文庫（波平青年図書館）と呼称されていた1961年頃まで波平青年会であり、その主たる運営費は青年会の予算であった。この頃、青年会は、共同耕作地（300坪）からの収入を諸行事や運動競技、産業講習会、教育隣組の教育費等に充てていたが〔戦後沖縄社会教育研究会編 1978〕、図書館運営もこれによって支えられていたものと考えられる。波平公民図書館として再出発するのは1962年からであり、波平区公民館の予算で運営された（「表3. 波平公民図書館の変遷」参照）。このように、青年会による公民館図書室の設立・運営は、青年会の村の復興・再建にける願いを基本としながら、自覚的・自治的な行動の結実した“かたち”を生み出した。

3. 波平青年文庫・波平公民図書館の活動と図書文化活動の広がり

青年文庫に対する公民館予算からの助成は、1961年（昭和36）まで続き、翌年は、館内の手狭さと建物の老朽化に伴い、全面改築がなされた。1963年7月に完成した図書館は波平公民館の特別会計から8,000弗計上されて完成したものであり〔新垣秀吉 1969〕、新図書館建設を契機に青年会運営の青年文庫から公民館運営の波平公民図書館へ転換された。波平公民図書館は、図書館運営の強化のために運営委員会を設置し、専任司書係を置いたのが特徴的で

ある。新図書館開館後、「波平公民館運営規約（1965年1月）」が出来たが、その規約をみると、公民館の最高企画機関である審議委員会の各部組織のひとつに文化部が位置づけられ、ここでは学事奨励会や社会教育に関する事項等と並んで図書館に関する事項も取り扱われるようになっていた。つまり、波平公民館の組織のなかに図書館の運営が位置づけられ、公民館の役員としての司書は、「図書館運営を司どる」（第33条）とされた。司書の業務は、館内外の清掃、書架の整頓、戸締まりを始めとして、図書の貸出・管理、読書指導、利用者状況調べ、各種出張等、多岐にわたる内容であった。この各種出張の中には、沖縄図書館協会、中部司書研究会、司書講習が含まれ、公民館図書室としての情報収集や司書の資質能力を高める研修内容も含まれた。こうして公民館運営規約の中に「司書」に係る規則が明文化されたことは、公民館活動のなかに図書室運営が位置づけられ、住民総意のもとで字公民館を拠点に図書文化活動が再出発したことを意味した。

波平公民図書館の有給司書として採用された者は、金城キク（昭和14年生）である。金城は、1958年に読谷高校を卒業し銀行に採用されたが、波平公民図書館の図書係として1960年に採用され1963年まで勤めた者である。金城は、銀行員と同待遇での採用であった、と述べている⁽⁸⁾。また金城は、石川琉米文化会館の指導を受けながら、図書の購入や整理、貸出業務一切を担当した。蔵書冊数は1,532冊（1963年）、2,382冊（1964年）、2,670冊（1965年）と増加した。こうした蔵書冊数の増加は、1962年（昭和37）の字内の献本運動や南方同胞援護会からの一次配本（1963年）によるものであった〔知花 1964：5-6〕。

1965年の図書館運営機構図をみると、館長、

表3. 波平公民図書館の変遷

名称	青年倶楽部	波平青年文庫／波平青年図書館	波平公民図書館／なみひらたんぼ文庫
年（西暦）		戦後－1951 1952－	1962－ 1997－
運営主体		波平青年会	波平区公民館
運営予算		青年会予算 公民館運営予算から助成（1954－1961）	波平区公民館運営予算

副館長、図書館運営委員8名の下に、図書選択部5名、貸出部(司書・青年会)、サービス部5名、ライブラリークラブが置かれていた。開館時間は夏期は午後2時～10時、冬期は午後2時～9時である。金城が図書係として勤務していた1962年(昭和37)11月に第1回波平読書祭を開催している。金城の証言によると、子どもの作品展示等があったとしているが、第4回開催の波平読書祭では、作品展示、図書館案内、石川文化会館との懇談会、映写会、青年会のレコードコンサート、標語・感想文入賞者表彰等、多彩な内容であった〔読谷村 1965〕。また、金城キク作成の「1967年度図書館照合結果報告書」によると、一日の平均利用者は、館内77名、館外23名である。また、小学生の利用者60%、中学生17%、高校生12%の割合であり、分野別蔵書を見ると、文学が3割を超え、社会科学、歴史と続いている〔金城 1967〕。

ところで、波平の公民図書館の活動と専任司書の配置は、図書活動を進めてきた村内の他地区にも影響を及ぼしている。既に、楚辺公民館図書館は戦後早くから活動を始めていたが、楚辺青年会(文化部)は、図書運営や青年活動等について波平公民図書館を訪れ、懇談会を持っている〔波平図書館 1963〕。その後楚辺では教養部及び青年会文化部の要望を取り入れ、波平の専任司書の配置を倣い、1964年(昭和39)に司書を配置した〔宇楚辺誌編集委員会編 1999〕。

以上の公民館図書室の活動の成果は、1967年8月の「第1回公民館における図書館運営発表会」の開催に結実する。開催場所は、読谷村楚辺区民図書館である。この発表会は沖縄図書館協会、那覇、中部、北部各教育連合教育委員会共催で開催された。首里当蔵公民館の教育隣組との協力による読書活動の展開や楚辺住民図書館の読書に関する講演会、区内の理容館と美粧院を活用した移動文庫、教育隣組単位の読書会の実施、多読賞の授与、展示会等を取り組みを報告している〔ソ辺区民図書館 1967〕。ここで登場する教育隣組は、子ども会の前身にあたる地域子ども組織であり、1960年代に入ると各地域で組織化され、活発な活動を進めて

いた。特に楚辺区民図書館では、教育隣組単位に図書館内で読書会が開催されたり作品展が行事として行われる等、教育隣組も公民館図書室と結びつきながら活動を展開したのである。

このように波平公民図書館は、活動の拡大・強化を背景にしながら他地区への自治的な文化活動の有り様を提起し、また集落全体の自治的な文化活動を牽引している。これらは、住民による自治的・自発的な共同事業であり、集落における教育文化活動の具体的な姿であった。自治的な文化活動の拠点としての波平公民図書館は、以後、地域の教育諸問題にも対応しながら新たな展開をみせるのである。

4. 読谷村不良化防止運動と児童文庫・青年文庫の整備

戦後、読谷村は青少年の保護育成と環境浄化を目標に「青少年不良化防止運動」を展開した。1958年(昭和33)5月の第7回運動は、青少年の盗犯の防止と環境浄化を運動の目標に掲げていた。こうした取り組みの背景には、青少年による民家や軍施設からの窃盗行為が多発していたからである〔読谷村 1958〕。一方では、村内の交通量の激増と大型バスの運行、軍用車輛の増加に伴い、輪禍から子どもを守るために各集落内に遊び場が設置された。読谷村の「子供遊び場設置補助」による整備事業は、主に集落内における遊び場の整備補助事業であった。1958年5月の子どもの遊び場設置状況によると、村内15の集落で遊び場が完成し、滑り台やブランコ、シーソー、鉄棒、砂場等が設置されている。この遊び場の設置は、青少年の環境浄化と環境整備の立場から進められたものであり、同年11月の「第8回読谷青少年不良化防止運動実施計画」は、各字として健全娯楽施設の設置を奨励している。これをみると、「各区の公民館を開放して図書児童文庫を備え教養を高める」「子どもあそび場所の設置促進維持強化を図る」「あそび用具の増設とくに運動用具を備える」等となっていて、遊び場設置と並んで公民館図書室の充実強化を謳っている。1959年の「第9回青少年不良化防止運動」は、その

実施事項として11項目を掲げ、部落懇談会の開催や村だより、親子ラジオによる宣伝啓発と並んで、「各字公民館の児童、青年文庫の強化」を挙げている〔読谷村 1959〕。

波平においては、1957年（昭和32）の字公民館の運営方針で、図書や遊び場の充実、健全娯楽の奨励が謳われ、図書文化事業を展開していた公民館図書室は、健全育成を図る視点から改めて見直されるのである〔読谷村字波平 1957：2〕。読谷村の青少年の置かれている状況に危機感を抱いた村民は、不良化防止運動を展開しながら、各字の取り組みのひとつに字公民館図書室・文庫を子どもの健全育成の場として捉えていたのである。村民の不良化防止対策と公民館図書室との関係を表す1960年代の関係資料は散逸して確認できないが、日本復帰直前の1971年5月の「広報よみたん」では、公民館活動のなかで青少年の健全育成を図るための議論が行われている。これをみると、公民館活動でスポーツ行事や学事奨励会の開催、そして「図書館を通して教養の向上をはかる」ために「図書をそろえて学習の場にすることが望ましい」としている〔読谷村 1971〕。こうして公民館図書室は、地域における青少年の健全育成の場として認識され、「学習の場」として期待されるのである。

おわりに

波平公民図書館は、当初、村の復興と再生を願う青年会を中心に設立運営され、自覚的・自治的な運動を展開してきた末に実現したものであった。図書室の実現には中核となる指導者の存在とそれを支える青年層・区民の力が結集したからであり、青年会の地域文化活動に対する貢献は大きかった。公民館図書室の設立運営は、青年会が主体的に担っていたが、これは、戦後の「わが村」の教育文化に関わる復興の担い手は、当時の青年自身が自覚的・自治的な意識を持ちながら、それに突き動かされて運動を展開したからである。財政的な事情により青年図書館は、波平公民館図書館として字の公民館附設の図書室として生まれ変わるが、区民に対

する図書文化活動を広めたいとする発足当初の青年会の願いは、継承され、発展的な活動を繰り広げた。成長した公民館図書室は、住民に対して図書文化を提供し、また住民の支えにより公民館図書室を中心にしながら集落全体の自治的な文化活動を牽引していきながら、他地域の図書文庫活動にも影響を与えた。しかも、公民館図書室は、地域における青少年の健全育成の場として改めてその機能が期待されたのである。これらのことから、公民館図書室はまぎれもなく住民の中の教育自治に根ざした共同体的教育文化事業であるとともに、自治的文化の生成と継承を創出し、自覚的な住民による豊かな地域づくりの可能性を示している。

付言すれば、波平公民図書館は、青少年の活動の場所、地域の文化、教育、交流の館として広く住民に親しめる図書館を目指して（波平公民図書館活性化計画委員会／1996年結成）、1997年から「なみひらたんぼぼ文庫」の名称に変わり、平成21年度は波平区公民館全面改築のなかで、「たんぼぼ文庫」の在り方が議論されている。住民参加型の文庫の運営と子どもの居場所づくりの視点から、新たな公民館図書室の創出が期待されている。

注

- (1) 桃原区青年文庫には、戦後引き揚げ者の図書が借り集められた。青年文庫開設当初から深く関わっていた当時の北谷初等学校教員の津嘉山寛喜は、教員や青年会員が当番制で図書業務に従事し、十進分類による図書整理を行っていたと述べている。また、図書の貸し賃を徴収し、これを新図書購入に充てたという〔下勢頭誌編集委員会編 2005:350-352〕。
- (2) 字楚辺では、1951年に青年会文庫が発足し、1964年専任司書が置かれ図書館の運営は司書を中心に行われた〔読谷村 1967〕。また、近年、米軍基地からの収入を基盤に体育館附設の大型公民館を建設した（2003年）。館内には図書室を拡充整備し常勤の司書を擁する等、積極的な図書館活動を進め

ている。

- (3) 村内の公民館図書室の中で、1960年代初頭の「図書目録」が残されているのは、渡慶次公民館である(読谷村史編さん室・福地加奈子作成「渡慶次公民館図書目録」)。これをみると、当時、公民館図書室で備えられた図書の分野や区民の読書傾向がわかる。「目録」によると、1961年4月から図書の受け入れが始まり、翌年から教育委員会の寄贈、1966年からは石川琉米文化会館からの寄贈もある。「目録」は、受け入れ年月日、登録番号、著者名、書名、価格、分類図書記号、備考の欄からなり、1,108冊を記録している(その内10冊は分類不明)。日本十進分類法をもとに1,098冊を分類すると、4割は小説や物語等の文学で占め、2割は小中学生向けの学習指導に関わる教育関係書、続いて自伝・伝記・人生訓・教訓等となっている。石川琉米文化会館からの寄贈の多くは、社会科学関係書である。
- (4) 波平公民館の門柱は、右に「経済門」、左に「文化門」と刻み込まれ、波平の経済、文化の発展を象徴している。かつて存在していた字の共同売店は経済振興を、公民館図書室は文化振興を意味した。
- (5) 上地正夫からの聞き取り(2008年8月26日、於：なみひらたんぼ文庫)。
- (6) 上地武雄からの聞き取り(2008年8月26日、於：なみひらたんぼ文庫)。
- (7) 知花昌徳からの聞き取り(2008年9月10日、於：那覇市古島、知花昌徳宅)。
- (8) 金城キクからの聞き取り(2008年9月12日、於：読谷村字波平、金城キク宅)。

参考文献

- 字楚辺誌編集委員会編 1999 『字楚辺誌「民俗編」』字楚辺公民館、141頁
- 新垣秀吉編 1969 『波平の歩み』41、72-73頁、79頁
- うるま市志川市史編さん委員会編 2006 『具志川市史』第6巻、510-520頁

- 下勢頭誌編集委員会編 2005 『下勢頭誌』北谷町下勢頭郷友会、350-352頁
- 金城キク 1967 「1967年度図書館照合結果報告書」(読谷村史編集室蔵)
- 小林文人・平良研一編著 『民衆と社会教育-戦後沖縄社会教育史研究』1988 エイデル研究所、1-5頁
- 小林文人・島袋正敏編 2002 『おきなわの社会教育-自治・文化・地域おこし-』エイデル研究所
- 末本誠 1988 「琉球政府下、公民館の普及・定着過程-ムラと公民館」小林文人・平良研一編著 『民衆と社会教育-戦後沖縄社会教育史研究』エイデル出版社、195-226頁
- 戦後沖縄社会教育研究会編 1978 『沖縄社会教育史料』第2集、92-93頁
- ソ辺区民図書館 1967 「第1回公民館における図書館運営発表会」(読谷村史編集室蔵)
- 高志保区 「昭和7年度以降 予算決算書綴」(読谷村史編集室蔵)
- 知花哲雄 1964 「波平公民図書館の沿革と抱負」5-6頁(読谷村史編集室蔵)
- 波平図書館 1956 「部落の歩み」21頁(読谷村史編集室蔵)
- 波平図書館 1963 「日誌(1963年度)」(読谷村史編集室蔵)
- 山城吾助編 1971 『渡慶次の歩み』83頁、165頁
- 山城千秋 2007 『沖縄の「シマ社会」と青年会活動』エイデル研究所
- 読谷村 1958 「読谷村だより」第23号
- 読谷村 1959 「読谷村だより」第41号
- 読谷村 1965 「読谷村だより」第105号
- 読谷村 1967 「読谷村だより」第120号
- 読谷村 1971 「広報 よみたん」第149号
- 読谷村史編さん室・福地加奈子作成「渡慶次公民館図書目録」
- 読谷村字波平 1957 「公民館落成式、総蹶起大会要覧」2頁(読谷村史編集室蔵)

(名桜大学)